

『山月記』から『先導獣の話』へ

—現代文学における「人間性」の変容に着目して—

木村 東吉

一 はじめに

古井由吉の『先導獣の話』は、若い獣が何かの気配に怯えて駆けだしたのに触発され、群全体が一斉に駆け出すという印象的な場面から始まっている。これは語り手による夢想の一部なのだが、彼がこうした夢想に耽るようになったのは、地方に五年を過ごして都市に帰ってみると、朝のラッシュ時の人の流れがあまりにも整然としていて静かなので、これに違和感を感じたことが契機であった。彼は《都会とは恐ろしいところだ》とつぶやき、これにパニックを起すものを想像し、《先導獣》という言葉を書き思いつく。ところが、今度はこの言葉が心にひっかかり、《先導獣》のイメージを求めて夢想に耽るうちに、彼自身がその《先導獣》になっていたという。語り手が都会に帰って一年二ヶ月を経たころ、酔っているところを学生デモに巻き込まれて骸骨踊りを演じ、自身が考えた《先導獣》

になっていたというのである。作品を読み終えてみると、こうした事件の後で、語り手が入院しているところに先輩の見舞いを受け、この時点から全体が回想されていたことが、読者にはようやく分かる構成になっている。

これを読んで思い出されるのは、中島敦の『山月記』である。もちろん『山月記』は中国の唐の時代の話で、詩人になろうとして虎になった男の話である。これに対し、『先導獣の話』は現代の都会の話で、主人公も動物に変身するわけではない。けれども、この二作品では、話の要素所に共通点がある。例えば、いずれも人の内面にあったものがふとした機会に外面に現れ、これが主人公たちを《獣》にして彼らの運命を狂わせている。また、彼らが《獣》になった契機を、いずれも自身の内なる「人間性」にあるとしており、主人公たちは自身の内に残る「人間性」を煩わしく感じ、これを捨てることができれば安易であろうとさえ思ったりする。彼らは、虎になったり《先導獣》になったりすることを意識的には嫌悪しなが

ら《獸》になるわけだが、その来歴を確認する場面は、友人や先輩に対して、物陰に伏した主人公がこれを回想している。これらの点からすれば、『先導獸の話』の作者は『山月記』を意識し、これをパロディー化しているように思われる。笑話のレベルでいうなら、『先導獸の話』の主人公は最後に酔って大虎を演じてもいる。

そして更に興味深いのは、二作品の成立時期に四半世紀のずれはあるが、これらがいずれも作者の文壇登場時に発表されたもので、モティーフとして作家へと自立していく作者の問題意識が織り込まれており、そこに時代状況を反映した人間性の変化が見られる。本稿では、こうした点に注目して両者を比較考察してみたい。

二 状況としての不安

『先導獸の話』の語り手が夢想に耽るようになった原因は、地方の静かな街で五年を過ごした彼が、都会に帰って《都会とは恐ろしいところだ》と感じたことにあつた。その契機は、通勤ラッシュ時のプラットホームにおける異様に静かな「殺到の秩序」に対する違和感であつた。その「殺到の秩序」の静かさについては、都会の間たちが、朝夕にはきわめて人間蔑視的な改札口を「すこしのいら立ちも見せずに通り返けると、誰に命令されたでもないのに、フロアーにまんべんなく流れ広がって、人を押し退けようとするでもなく、無理に追い抜こうとするでもなく、群のテンポにびつたりと足並みを合わせ、それでいて密集のふとゆるんだところがあれば、すぐに間隙を満たし」ながら、「やがて階段にさしかかると、流れは静かに淀み、先のほうからゆっくりと傾い」て、「まるで苔むした岩の上を平たく滑り落ちる音なしの滝」のようであり、それは「見つめているとかすかな目まいを誘い出す」ほどであると描かれている。

語り手は「この静けさの印象が群衆の流れの異様な滑らかさから来ると気づいたとき、新参者としてただもうひるんでしまった」という。もちろんこの群衆を形成する人々がこの秩序を守っているのは生きるためであり、毎朝のことで、訓練もされているからである。このことは語り手も理解しているのだが、この群衆の静かさがなぜ《恐ろしい》かといえ、この静かさを作り出している秩序が、その内部に無気味なものをはらんでいるからである。この無気味なもの一つは「それぞれほかの人間たちを押し退けんばかりのいらだたしさ」であり、二つ目は周囲に対する関心を遮断した孤独であり、三つ目にはこの全体の秩序の壊れやすさに対する不安である。これらが合わさって構成する無気味な緊張の中にあつて、「まさにそのいらだたしさのゆえに」「急がば回れをおのずと心得た殺到の秩序」によるものだからである。語り手は次のような体験によつて、それを確認している。

「ある朝」彼は「ターミナルのホームによく降り立つや、たちまち四十歳ぐらいの男を追い抜いて、何とはなしにその後姿を心にとめた」のだが、その男の姿が、「なぜかいかにも犬儒的に映つた」ので、「いきなりわけもわからぬ忿懣に満たされ」て、「乱暴に」あるいは「ささやかな無法者」となつてまで人の流れをかき分けて急ぎ、乗り継ぎ電車ではようやく一つ差をつけてみる。しかし、最終的には静かに歩を運んでいるように見えるその男と結局は同じ早さで進んでいたというのである。これが見かけは静かに流れている群衆の「殺到の秩序」の一面である。

一方、通勤ラッシュ時における群衆は、少しでもその動きを止めれば、個々の内面の孤独をさらけだし、同時に周囲に対する不安を露わにする。語り手は、ある朝地下鉄が三分遅れたために「どこかの大祭ひとつ分ほどの雑踏をつくり出した」場面に遭遇し、周囲を観察している。立錐の余地もない混雑の中で、人々は「起きぬけの

無残な素顔」を浮かべ、「前の男の広い背に額を押しつけるようにして立っている」女には「家族にさえ見せないようなすさんだ顔」が透けて見え、あどけない娘が「スカートのふくらみに手をまわして、目をそむけたくなるような動作を無意識のうちにやっている」のを見る。混雑の中にあつて人々はそれぞれ自分の世界に閉じこもり、周囲への関心を完全に遮断しているのである。新参者の目でこれを観察した語り手は、「孤独とは人を無恥にするものだ」と結論する。

しかし、その反面、自分が周囲に刺激を与えるかも知れない場合には、人々は戦々恐々として細心の注意を払っている。語り手は、柱の陰で二人の中年の男が「ちようど昔風の商売人が懐を寄せあつて声も立てずに蝶々と指商談をかわしている」ような様子で喧嘩をしていた場面を捉えている。語り手は、ここで、内部に自己制御の分別を持たない彼らの表情に「ずるずると感情の深みへはまっていづく者」の哀しみを見て薄気味悪く思うと同時に、「あの二人は自分たちの気狂い沙汰が人目に触れるのを、自分たちのために恐れたばかりでなくて、まわりの人間たちのためにも」恐れ、「どす黒い血を流す怪我人をまわりの眼から隠そうとする者たちと、つまりは同じことをやっていた」と考えている。二人の男が小突き合いの間に示していた配慮は、きつかけさえあればいつでも狂奔に向かいかねない群衆の、壊れやすい秩序の中にあるという不安に対するものだというのである。

こうした分析を経て「周囲の滑らかな動きと静かな渋滞の中にひそむ狂奔への不安」を析出した語り手は、これを「いつ崩れ落ちるかもしれないドームの下で暮らしている者」が、「我を忘れて吠え猛る時でも、思わず知らず声をひそめ」るのと同じだとし、これは殲滅兵器を大量に抱え込んでしまった現代の世界情勢の不安と同じものだとする。この作品が発表された一九六八年は東西冷戦の最中

にあった。しかも殲滅兵器も機械であるから、誰かの気紛れによってボタンが押されたら人類の滅亡にもつながりかねない状態を地下鉄駅のパニックも同じだというのである。しかし、そうした不安の中にあつても、人は今を生きるより他はないので、頼りないとは思いつつながら人間の理性に「独裁者」としての位置を認めているのだとする。

『山月記』が雑誌「文学界」に発表された一九四二年三月は、日本の真珠湾攻撃から三カ月を経た時期にあたっている。作品の成立はそれより約十ヶ月から一年程度前と考えられるが、いずれにしても日本がまさに狂気に向かつていた時期にあつた。しかし、地球全体を覆うこのような不安は、作品にまったく影を落としていない。中島敦は人間に襲いかかる運命の不条理にも無関心ではなかったが、彼が注目した運命は、人力の及ばないところから人を支配する力であつた。人類全体の命運さえ人が握ってしまった現代の不安は、この段階ではまだ想定されていない。これに対して『先導獣の話』が発表されたのは、アポロ計画によって人類の月面着陸が果たされる一年前である。人類が宇宙から地球を捉える視点を得て、宇宙船地球号といった視点を共有し、人間が共同して自然を保護するという、従来とは逆転した考え方が生まれてくる直前の異様な雰囲気、ここには捉えられている。『先導獣の話』が発表された時代では、「いつ崩れ落ちるかもしれないドームの下で暮らしている」不安に対して、人々は幾重にも緊張を強いられながら、個人的にはほとんど皮膚を接しないばかりにいる隣の間にも無関心な孤独の中で生きていくのである。それでいて、こうした認識に対して、語り手は「私の夢想はここまで来て、自分の阿呆さ加減に愛想をつかして沈黙し」てしまったとし、「群衆の静けさが殲滅への不安と何かのかわりがあるとは、つゆ思わなかった」としている。日常的には、こうした不安が無意識のうちに沈められている状態にあるこ

とを示しているであろう。

三 主人公の「人間性」について

このように状況に差はあっても、二つの作品において、両主人公の「人間性」は、皮肉なことに彼らの《獸性》と表裏の関係にあつて、彼らの社会的適応を損なわせる原因になっている。しかし、両者の「人間性」の内実に注目してみると、そこに大きな違いがある。

『山月記』の李徴の場合は、若くして官吏登用試験に合格し、江南尉という地方武官に補せられた。しかし、彼は「自ら恃む所頗る厚」かつたために、「死後百年の名」をもとめて「官を退」き「人と交を断つて」詩作に耽る。けれども「文名は容易に揚ら」なかつたので、衣食のために地方官吏の職を得ると、かつては齒牙にもかけなかつた同僚がはるかに高位にあつて、その下命を拝さねばならなかつた。このために彼はさらに自尊心を傷つけられ、「狂悖の性」を抑えがたくなって発狂し、虎になつたという。この運命を招いた原因について、李徴は自ら述懐し、臆病な自尊心と尊大な羞恥心に加えて、詩人としての名を残したいという欲望を家族愛より優先したためだとしている。彼は社会的にエリート・コースにいながら、死後百年の名を求めるといふ肥大した理想我を持ち、そのために現実の自己が受け入れられなくなるとともに、社会的適応性を欠いた人間ということになる。李徴が虎になつた姿とは、社会的交わりを断ち、近づく人を傷つける存在に他ならない。

精神科医で不登校児の問題に尽力し吉川英治賞を受賞した森下一の『不登校児が教えてくれたもの』(グラフ社、二〇〇〇年一〇月)を参考してみれば、これは現代の優等生が突然不登校に陥る類型の一つに属している。不登校児の場合は、内発的なものが育つ余裕もないままに、両親の期待と偏差値教育を押しつけられ、疲れ果て

た結果が生み出した悲劇であるとされている。作家の反俗的姿勢が当然視され、社会的意味を持つていた時代には、李徴の非社会性も強い自我意識に支えられており、日本の近代文学ではむしろ正統的であり、肥大化したエゴに臆病な自尊心と尊大な羞恥心といった説明がつけられることで、彼の悲劇は性格悲劇として読まれてきた。しかし、今日のように反俗性が価値観の多様化の中に解消し、反俗が死語と化した時代になると、実力を伴わない自尊心が傷つくことを恐れて臆病になり、自分に対する期待水準が高すぎるから現実の自己を否定的に見る羞恥心が強くなったわけで、社会的引きこもりの一典型といえるであろう。

李徴は化虎となつた後も、妻子の衣食を気にかける配慮を保つ一方で、長安の風流人士の机の上に自分の詩集が置かれていることを夢に見るといつている。肥大化した理想我とそれ故に満たされぬ自嘲が彼の「人間性」であつた。虎になつてしまった李徴にとつて、人間であつたことの記憶は悔恨の源泉となるだけであるから、「己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう」とする。しかし、それは彼にとつて完全なアイデンティティーの喪失でもある。したがって彼は「己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐる」というのである。作品は、李徴が克己を厭う怠惰を反省し、失われた才能を惜しむ悔恨で結ばれている。反俗的詩人を目指した男の悲劇を描いた作品であるが、刻苦勉勵を反面から讚美する時代の風潮は、やはり反映していたのである。

これに比べ、都会育ちの『先導獸の話』の語り手は、大学を出て就職した後、静かな地方の街で五年間「古きよき私小説的生活」になじみ、「呑み屋のつけのきくのをよいことに、文なしでぶつ倒れるまでほつつきまわることを覚え」とともに「行く時にはいなかつた女房と赤ん坊を連れて都会にもど」ってみると、「すこしばか

り人間的になりすぎ”ていたというのである。肥大化した自我をもっていた李徴とは違って、彼はごく平凡な存在で、最後まで名前すら与えられていないのである。

語り手は毎朝の通勤ラッシュに対する違和感に加え、会社での仕事の場面での人間関係からノイローゼになるのではないかと恐れたという。この作品では、通勤時の電車の駅などでの夢が、語り手にとつての思考の場となり、会社での人間関係がその実現の場となる形で対をなして、彼には会社の人間が無気味なほど有能に見えるたのである。

語り手が地方の街にいたころなら三人で大騒ぎをしながら三日かかり、三日目の夜には三人して祝盃を上げたほどの仕事を、隅のほうの机にひっそりと坐りついて一日で片づける先輩を見て「むき出しの白刃を見るような思い」をし、素直に「指導を願おうと思」っていたその人が、会社では「度し難いマイホーム」主義者とされている。先輩もこれを承知しているため、同僚に対して「煤けたような微笑を浮かべながらやんわりと頭を下げ」ているのであるから、語り手はまさに秀才に囲まれた落ちこぼれである。『先導獣の話』が『山月記』をパロディー化しているのはこんなところにも指摘できる。猛烈社員や壮烈社員が当然視されていた時代の反映がここにある。「殺到の秩序」は会社の中にもあるわけで、高度経済成長期の日本の社会情勢の内面を見事に捉えているといえよう。語り手の新参者としての不安は、こうした環境におかれたことで不可避のものとなっていた。

因みにいえば、この先輩について「まわりの人間たちは彼を坊主か学者のように滑稽な存在と思っている様子だった」としている。その理由は「妙なプリンシプルがあるらしくて」「自分からは何もしない」というところにある。語り手の観察によれば「蕎麦の食い方ひとつにも、ひとつのやり方をひっそりと、にこやかに守ってい

るような笑止ぎがあった」という。近代文学史の中でこれを読むなら、鷗外の私小説「半日」の主人公高山峻蔵の面影が彷彿とすることがある。彼は文科大学教授の地位にありながら、妻の不機嫌をなだめるために予定していた孝明天皇祭のために賢所へ参内を取りやめ、朝の洗顔にも、妻から「茶の湯」と評される作法があると自嘲的に描かれている。『先導獣の話』の段階になると、一定の教養を持ち、日常生活にもそれを体現している人物が、かえって滑稽に見える大衆化社会が実現しているわけである。語り手はさらに、この先輩を次のように観察している。

端正な顔の中でいつも子供のように潤んでいる眼と、いかにも無防備そうな唇を見てみると、この人は本気にやり出したら仕事の枠の中に止まらなくなってしまう人ではないかと私には思えてきた。とすれば、彼の生き方は何といっても正しい。周囲の人間を物狂わしい言行で悩ますのを避けるためなら、こうして蒼白くにこやかに生きるのが人間的な分別というものだ。にもかかわらず、このようにおのれを守って生きているということが、私には淫らなことに思えてならなかった。このような大人しい分別に従って、彼はかえって自分をいつまでも幼く物狂わしいままに保っているのではないだろうか……。

語り手からすれば、先輩は「本気にやり出したら仕事の枠の中に止まらなくなってしまう人」と思われるので、「自分からは何もしない」で「おのれを守って生きる」ことは正しいとする。しかし、それが結局「自分をいつまでも幼く物狂わしいままに保っている」ことになるため、その幼く物狂わしい自分を露わにするという意味で、語り手にはこれが「淫らなことに思えてならなかった」というのである。能力と個性を持った人物が固くおのれを守った生き方をすると、協調性に欠けるところが出る。語り手はこれが淫らなことに思え、周囲からも浮いた存在になるわけである。

語り手は、駅で出会った犬儒的な夕立男についても類似した感想をもっている。

あの端正で、どことなく犬儒的な夕立ち男のイメージが私の心にしつこく残っていた。あの淡々たる足どりと、私の憤然たる足どりは、流れの淀むごとに薄気味悪いほどぴったりと落ち合ったものだった。(中略)そしてどう歩いたところで結局は同じことだという悟りこそが、あの端正な姿に、どことなく犬儒的な表情を与えるのだろうか。(中略)そうやって犬儒はさまざまなこだわりを切り捨てて、おのれの快楽を醇化する。犬儒とは、私の思い浮べるところでは、心の快楽を濁りから守ることにもっとも繊細で柔軟な精神をそなえたものである。(中略)してみると、私はあの夕立ち男に大いに共感を覚えてもよいはずだった。それなのに私は、あの後姿を偶然目にとめるや、たちまち憤りを覚えたものだった。胸を張るともなく背を真直に伸ばし、その上で頭をいきなりいかにもやさしげに垂れ、庭石をひとつひとつ踏んでいくような足どりで雑踏の中をひんやりと歩むその姿が、誰に不快を与えるでもないその姿が、私にはまるであたりはばからぬ耽溺のように見えたものである。

ブラット・ホームの雑踏の中を「庭石をひとつひとつ踏んでいくような足どり」で「ひんやり」と歩くこの夕立男が、「蕎麦の食い方ひとつにも、ひとつのやり方をひっそりと、にこやかに守っているような」先輩と同類であることはいまでもあるまい。先輩のマイホーム主義は「さまざまなこだわりを切り捨てて、おのれの快楽を醇化」した生き方の一つであろう。静かに自分を守り、そのことで大衆社会の中では浮いた存在となっている人物である。

語り手は、後になってみればこの夕立男を知的に理解できるのに、その場では感覚的に反発を覚えているし、先輩についても、「指導を願おうと思うほどに殊勝になって」いながら、近づけないでい

る。理由はこれらの人物がおのれに対する「あたりはばからぬ耽溺」を見せ、これが「淫らなことに思え」たことにある。電車の駅での喧嘩を見たときも、語り手はこの二人のことを想像しかけて自分の顔に「狂人の顰め面」が浮かぶのを感じたという。二人を争わせてみたいという思いの底には両者に対する反発があるのだろうが、その争いには狂気を誘うものが想像されたであろう。そして自分の想像に苦痛を感じたということの裏には、二人への親近感を窺わせる。一面では惹かれながら、反発していたのは、この時の語り手にとって、都会の生活に早く順応することが当面の課題だったからである。事実、彼は当面の課題を懸命に克服していた。しかし、それは彼自身の人間性を抑圧することでもあった。

ちょうどその頃、私はあるむずかしい仕事にたずさわることになった。それは、私の全体ではなくて二、三の特性をぎりぎりまで要求するような仕事だった。そしてその仕事をとにもかくにもやりとおせるためには、私はまわりの人たちと同様に恐ろしく有能な人間にならなくてはならぬ定めだった。私はそれを感じるやいなや、誰に不快を与えるでもないその姿が、私にはまるであたりはばからぬ耽溺のように見えたのである。有能な人間になるのはまだ早過ぎるような気がした。はじめの三ヶ月という時期は、日夜私の神経をぎしぎしと軋ませて流れ過ぎた。それから、相変わらずかつがつな状態ではあったが、それでもようやく走り出した列車の滑らかな進行に心地よく耳を傾けるような、そんな時期がやって来た。私の勘はなにかよそよそしく冴えかえり、それにつれて心のほうは睡くなった。そしてときおり私は仕事に没頭しているその最中に、ふっと溜息をついて寝返りをうつような気持から、《人間である面倒はもうこれぐらいにして、この滑

らかな機械の動きそのものになりきってしまったら、いつそどんなにか心地よいことだろう」とつぶやくことがあった。静かな街で五年も暮らしているうちに、すこしばかり人間的になりすぎたのだ。これで元にもどったまでだ。そう私は考えた。たちまち一年たってしまった。

ここで、語り手は、「神経をぎしぎしと軋ませ」ながらも、自分の仕事をこなし、やがてこれに慣れ、それと共に《人間である面倒はもうこれぐらいにして、この滑らかな機械の動きそのものになりきってしまったら、いつそどんなにか心地よいことだろう》とつぶやいている。化虎となった李徴にとつて、彼が人間であったことの記憶を失うことは、社会との完全な断絶を意味した。『先導獣の話』の語り手にとつては、逆に「機械の動きそのもの」になることが会社人間になることを意味しており、むしろこの方が、「心のほうは睡く」なつて「心地よい」というのである。戦後社会の変貌が端的に捉えられた部分である。特定の技能においては優秀な、ほとんどロボットと化した人間が社会の大勢を占めるに至っているのである。森田一は不登校児との交流を通じて、彼らの方が人間的だと感じることもあると言っている。社会の変質は、個人にその「人間性」の放棄を迫るところまで来ているのであろう。

それにしても『山月記』の李徴の場合は、彼自身の人間性に強烈な個性とともに彼自身の理想我と実際の能力の間にバランスを欠いたゆがみがあった。これに対して『先導獣の話』における語り手の場合にはこれが無い。むしろ彼は凡庸で無難なサラリーマンだった。彼の都会への順応の努力が、何故望まぬ《先導獣》となるという結果を導いたか。次に、その経緯を確認していききたい。

四 《先導獣》への経緯

語り手は、自身がノイローゼに陥りそうな危機に直面していた時、都会の静かな群衆の中に「パニックを惹き起すことができるだろうか」と考えるようになったという。彼は後になって「よくもくだらぬことを考えたものである」と反省しているけれども、同時にそれは「大都会にもどつて来た人間の、軽い現実喪失の産物」であったと、その心理的必然性を説明している。彼は「根が都会人でもあり、扶養家族のないではない身だけに、何はともあれ巨大な現実に従うことはわけもないこと」であったのだが、そうした表面的適応とは逆に「おもてでは現実に従つておとなしく振舞つていながら、内ではまだすこしばかりよそ者であると、奇妙な静けさが心の中に生まれ、その中をおよそ怪しげな思いがさまざまによぎ」つたというのである。

彼が考えるパニックはどのようなもので、それはどのようにして起きるかについては、次のように説明されている。

私は朝の雑踏の中でしばしば怪しからぬ思いに耽つたものだった。この静かな群衆の中に、今すぐにパニックを惹き起すことができるだろうか、という思いだった。(中略) 見るからに善良そうな誰かが、真に迫つた驚愕の表情でいきなり振り返り、流れを懸命にかき分けて走り出したとしたら、そしてまわりの人間たちの中でこの驚愕が感情的なものの境い目を一気に飛び越して、胸をびりびりとふるわすようなあのむしろ物理的な共振の状態に入ったとしたら、おそらく、十人ほどの人間が思わず十歩ほど引きずられて走り出すことだろう。そして十人もの人間が走り出せば、その中には、生活体験の重みを腹の脂肪の厚みともどもありありと感ぜさせる《大人しい》人間が一人はいるはずである。ここが、急傾斜にかかるかどうかの境い目ののだ。(中略) 《大人しい》人間が目をむき出して走り出した。その時、その滑稽さにもかかわらず、いやその滑稽さのゆえに、

おそらくパニックは溢れ出すことだろう。(中略) こうして群衆がいったん走り出したとする。そうすると、たとえそれが十秒後にはもうおさまり、わけもわからぬ一瞬の混乱として人々の眉をしかめさせるだけに終わろうと、同じことである。十秒という時間は長いものだ。そしてその間に十歩走った人間も、曖昧に五歩走った人間も、呆然と目を見はっただけの人間でさえも、自分が影に怯えたことを知り、羞恥がさらに不安とおもむろな狼狼を生み出し、そしてパニックは一人一人の心のうちで、茨を踏みくだけ、暗い地平線に向かって走りつづける……。

ここには、語り手が考えるパニックとその発生メカニズムが描かれている。まず「見るからに善良そうな誰かが、真に迫った驚愕の表情でいきなり振り返り、流れを懸命にかき分けて走り出し」たなら、十人ほどの人間が走り出すだろう。するとその中には、通常人々の行動基準となつていような《大人しい》人間が一人はいるはずで、そうした人間が駆け出すと「その滑稽さにもかかわらず、いやその滑稽さのゆえに、おそらくパニックは溢れ出す」という。そうして「群衆がいったん走り出した」ならば、それが「たとえそれが十秒後」におさまつたとしてもパニックは起きたのであつて、「その間に十歩走った人間も、曖昧に五歩走った人間も、呆然と目を見はっただけの人間でさえも、自分が影に怯えたことを知り、羞恥がさらに不安とおもむろな狼狼を生み出し、そしてパニックは一人一人の心のうちで、茨を踏みくだけ、暗い地平線に向かって走りつづける……」というのである。語り手がいうパニックは、イメージとしてのものであつて実際の社会的騒動よりも、何かを契機として人々の心の中に引き起こされる心理的なものが重視されている。彼に違和感を与えたものは、群衆の静かさだったわけだから、これに心理的動揺を与えることができれば満足だったわけである。

彼はこうしてパニックが起きるためには、最初に駆け出す「善良

そんな」人間と、これに触発されて駆け出す《大人しい》人間が必要だと考え、「パニックの最初に走り出す男にはどういふ性格がふさわしいかと、いらざる思いに耽り」はじめると、「ある種の目つきが、ある種の表情が浮かびかけた」のだが、これが彼に「あんなまり」だったので自分の夢想をもてあまし、《あれが先導獣というものだ》という言葉でけりつける。ところが、今度はこの言葉に引きずられて、彼流の《先導獣》のイメージを追跡するはめになる。

こうした言葉にこだわるところが語り手の個性だが、彼が《あれが先導獣というものだ》とつぶやいたとき、彼は通常の意味での動物の群のリーダーとしてのボス獣のことではなく「つかのま静かにうち広がって草を食む温順な獣たちの間で、遊び倦きた幼い獣が、いきなり何を思ったのか空に向かって奇妙な恰好で跳び上がる。すると群は真剣な恐れに揺すぶられてどつと走り出す……。私は《先導獣》という言葉のもとに、まだ無邪気な媚をふくんだ、それでどこか物狂わしい、小児の目を思い浮べていた」という。作品中の時間は、ここでようやく作品の冒頭部分に帰るようである。これに続けて、何かに怯えて動物の群れが駆ける様子を二・三夢想した後、動物にはパニックがないと結論し、語り手の思索と夢想は次のように展開する。

先導獣とはどんなものか、私にははつきり思い浮べられなかったが、しかしそれがどんなものでないかははつきりとわかつていた。それは強烈な個性ではなかった。(中略) このように滑らかに流れる大都会の群衆には、いかに強烈な個性をもつてしても、とうてい歯が立ちあはしない。そもそもあの流れの中に入つては、強烈な個性などというものがあろうだろうか。(中略)

かりにこの滑らかな秩序につかのまでも狂いを来たさせるこ

とのできる人物がありうるとしたら、(中略)誰もが拒みようもないほどに無害らしい人物ではないだろうか。そんな人物がいかにも没個性的な、水つぼい笑みを浮べて、人々の虚をすうつと通り抜け、もつとも荒々しい個性にも行き着けぬところに臆面もなくつかつかと入りこんで、そしてボタンを押すのかもしれない。幼児のように無垢な、獣のように無恥な眼を、私はまざまざと思ひ浮べて歯ぎしりしかけた。だがその眼は何もかも知っていて、ひそかな了解を求めるようにかすかな媚を漂わせている。

まず彼には、《先導獣》となりうる人物として、「滑らかに流れる大都会の群衆には、いかに強烈な個性をもつてしても、とうてい歯が立ちほしない」ので、むしろそれは「誰もが拒みようもないほどに無害らしい人物」ではないかと考える。すると、彼は「幼児のように無垢な、獣のように無恥な眼を、私はまざまざと思ひ浮べて歯ぎしりしかけた」という。求めていた《先導獣》の眼のイメージを探り当てると同時に、「歯ぎしりしかけた」という、これは一面では激しい嫌悪感を抱いているのであろうが、「その眼は何もかも知っていて、ひそかな了解を求めるようにかすかな媚を漂わせている」のを認めているのを見ると、《先導獣》は単なる言葉としてではなく、具体的なイメージをもち語り手に働きかけてくる存在となつていく。

では、語り手はここから《先導獣》と一気に同化していったのかといえ、そうではない。なぜなら、彼は意識的には《先導獣》を嫌悪しており、彼にとつて会社における役割を果たすことがまず必要であったからである。仕事は彼の「全体ではなくて二・三の特性をぎりぎりまで要求」し、彼の「神経をぎしぎし軋らせ」て、機械のように働くことを求めた。しかし、そこに努力を集中することは、心を一時休眠状態に置く安易さがあり、一面では人間性の抑圧でも

あつた。

しかし、社会へのこうした順応と習熟は、心にゆとりを生む。そこに語り手と《先導獣》との次の出会いが待ち受けていた。次の資料に示すとおりである。

しかしわれわれの心にも一年周期ほどの緩慢な満ち干のようなものがあるようだ。(中略)滑らかな仕事の流れに魅入られたように私は自分も機械になりたいと願ひ、やがてそんな願ひも忘れてしまい、そして一年も過ぎると、私のうちにまた性懲りもなく夢想が満ちてきた。

だが私はもう新参者ではなかった。

ある朝のこと、(中略)柱の根もとに一人の男がうずくまっていたのを目にとめて、たちまちそのそばを通り過ぎた。

どうせ二日酔いの悪感が満員電車の人いきれの中でぶりかえしたのだろう。(中略)両手が大理石の柱をひしひしとつかもつとして、その滑らかな表面でどうしてもとまらずにいるそのさまが、気の毒にも滑稽で深刻な効果を出してしまっている。しかし、おもむろにこみ上げてくる嘔吐の苦しみにぼうつと霞む彼の眼には、われわれがどんな風に映っているのだろう、と私はふと考えた。ことによると、われわれの脚はごうごうと地を駆る林のように見えているのかもしれない……。

その時、私は《これがパニックだな》とつぶやいた。そして自分の言ったことが、わからなかった。

しばらく仕事の流れに集中した後、一年を過ぎた頃また夢想に耽るようになった語り手は、ふと見かけた二日酔いの男に共感して、その男から見ると「われわれの脚はごうごうと地を駆る林のように見えているのかもしれない」と考える。作品の冒頭で、語り手が群獣が疾駆する様を夢想した場面で、「温順な群れがゆつくりと崩れ出し、若い気紛れな仲間を追うともなく、無数の肢がほとんどひとと

ころで林のようにざわざわと揺らいだ」とした部分を連想させる。これが彼にはそれと自覚がないまま「これがパニックたな」とつぶやかせたのであろう。二日酔の男は、流れの中に留まることで人の流れに逆走する群れの先頭に立つ形になる。語り手が「これがパニックたな」とつぶやくのは、このためである。しかし、ここでは「先導獣」に追隨して疾駆する群衆が確認されていない。これが確認されるのは次の場面である。つづいて彼は、二日酔の男に共感しつつ、周囲の人々の心象をも合わせて捉え、二日酔の男に「先導獣」をみることになる。

　　いったい、私は何を見たのだろう。心ならずもまわりの交通のささやかな障害物となって、柱の根もとにひっそりとうづくまっている男を、私は見た。そしてその体を細かく揺すぶって、内側から徐々にこみ上げてくるものがあつた。吐気は満ちに満ちきると、ふと快感とも悪感ともつかぬ異様な感じとなって深い静けさを内側に広げ、やがてその静けさの遙か底のほうからゆっくりと、まるで大きなやさしい魚のように、窒息感が浮び上がってくる。そしてみぞおちがきゅつと締って、周囲への緊張が細かく砕け、さわさわと雪のように降りはじめると、その時、あまりにも赤裸な孤独のまわりを、ごうごうと地を揺るがして走るものがある。

　　そして私は柱をこころもち迂回して通り過ぎる人たちの顔にかすかた嫌悪と同情の走ったのを見てとった。哀れにも雑踏の中で、おのれの苦しみに手もたく耽りこんでしまった男の姿を、彼らは目にした。それは今この瞬間、彼らのもっともなりたくない存在だった。しかしその存在は同じ瞬間、まわりの雑踏の静かな中心点となり、そして足速やに歩み去っていく彼らの存在感を、すうつと後方へ吸い取っていく。すると、彼らは柱の根もとにうづくまり、つかのま、あまりにもあらわな、あまり

にもいたけいな自我感に耽っている自分を思い浮べる。そしてうづくまりこむ自分のまわりを恐ろしい殺到がごうごうと駆けて行くのをぼんやりと感じる。自分自身がその一人である群衆の殺到を、自分自身の内側から、不安な気持で見まもる……。私はこれらすべてを一時に見て、「これが先導獣だ」とつぶやいた。

　　語り手は、まず二日酔の男を見て、そのもだえが頂点に達した時を想定し、その心象に同化して「周囲への緊張が細かく砕け、さわさわと雪のように降りはじめると、「あまりにも赤裸な孤独のまわりを、ごうごうと地を揺るがして走るものがある」のを感じ取っている。つづけて男を客観的な視点から捉えて、「雑踏の中で、おのれの苦しみに手もなく耽りこんでしまった男」が「まわりの雑踏の静かな中心点」となっていると観察し、同時に足速やに歩み去っていく人々の視線を捉えてその心象にも同化し、その「存在感を、すうつと後方へ吸い取っていく」として、その人々が「柱の根もとにうづくまり、つかのま、あまりにもあらわな、あまりにもいたけいな自我感に耽っている自分を思い浮」かべていると捉える。ここで心象のパニックが成立する。ここまでイメージを広げたくえで、今度は人々が想像した「うづくまりこむ自分のまわりを恐ろしい殺到がごうごうと駆けて行くのをぼんやりと感じるようになり、自分自身がその一人である群衆の殺到を、自分自身の内側から、不安な気持で見まもる」ようになったと付け加える。そこで語り手はこれらの全体を見て「これが先導獣だ」とつぶやいている。語り手によつて想像された群衆の心象スケッチとでもいう情景である。ここで語り手は「先導獣」の心象的なモデルを得たわけである。

　　この時注目されるのは、語り手の想像において、機械のように訓練された群衆の一人一人が、二日酔の男に寄せた心情を「あまりにもあらわな、あまりにもいたけいな自我感に耽っている自分」と捉

えていることである。語り手自身が「人間である面倒はもうこれくらいにして、この滑らかな機械の動きそのものになりきってしまったら、いっそどんなにか心地よいことだろう」とつぶやいたこともあったから、これを踏まえて群衆の個々人の内面をイメージしたものであろう。森田一がロボット人間の内面の未成熟を指摘し、二七歳の女教師が引きこもりになると、赤ちゃん返りすることもあると述べていることが思い合わされる場面である。

この後二カ月ほどたったある夜のこと、語り手は「ようやく仕事を片づけていくらか虚脱状態」にあった時、宵から「かなり酔っていた」ところを、公園の側で学生デモに巻き込まれ、デモが機動隊の規制によって公園内に押し返された後で、道路で寝ていたところを警察に保護される。この時の状況はおよそ次のように回想されている。

私は学生たちにひどく小突きまわされたのを覚えている。手もなく翻弄されている姿は、遠くからは、ときとして誇らかに叱咤している姿に見えるものだ。それに、泡を喰ってよろけまわっている善良な市民の手にプラカードを握らせるといふのは、これはなにか素晴しい余興である。そして最後に私はみぞおちをキュツと衝かれて気が遠くなった。これも学生の仕業だったと思う。

語り手は学生のデモ隊に巻き込まれて翻弄されていたわけだが、彼が大男の扇動者に似ているという一人の機動隊員の証言によって、警察が彼の背後関係を調べたために事件が会社にも知られることになり、会社の同僚たちが病院にやって来て、彼の「武勇を口々に讃めたたえた」という。ここで語り手は、同僚の心象において扇動者にされたわけである。調査によって嫌疑は晴れたのだが、語り手は「あの機動隊員はおそらく今でもあの印象を拭いきれないでいるだろう」と想像し、それは錯覚だと認めていながらも、「それは

もはや必ずしも錯覚ではなくて、私があの大男だった、と断言して言えないでもないのだ」と考える。語り手にとって、誰かの心象にあることなら、それは心象としての事実といえなくもないと言っているのであろう。彼が「先導獣」を認定したとき、彼自身の心象が、その判断の根拠であったことを考えるなら当然の結論である。そうすると、今度は彼が「先導獣」であると共に、自他の区別はもはや意味をなさず、自己拡散の感覚だけが残ることになる。

あの事故が私の中に惹き起した変化といえば、この奇妙な拡散の感覚だけである。しかしそのおかげで、私はいくらか変わってしまったように思う。私にとって、自分の内と外の区別が以前ほど定かではなくなってしまった。現に今こうしておもてでひっきりなしに降る雨の音につつまれて仰向けに寝ていると、私はまるで自分が無数の雨粒となって汚水の中へ落ちていくような、そんな感じにすうっと陥っていく。おもてで俺が降っている。とつぶやきはじめれば、これはもう立派な狂気であり、病院をかえなくてはならない。

語り手は、夢想の中で二日酔いの男に同化したり、二日酔いの男を見た群衆に同化したりしてきたが、学生デモに巻き込まれて骸骨踊りを演じ、さらには自分に不利な証言をした機動隊の一人にすら同化している。夢想の中で自他の区別が無くなり、ここに至っては自然の雨の音にも、一体感を抱いている。自我が完全に解体した状態というのであろうか。彼がそうした狂気寸前の状態にあるとき、先輩の見舞いを受ける。

そしてある夕方、静かなノックがして、蒼白い雨の午後の光の中に、あの先輩が幽霊のように立った。この人までがやって来るとは驚きだった。どうせ、皆が行ったからには自分も行かなくてはなるまい、と思つて来たのだろう。それでは、彼もまた皆と同様に、私の武勇伝について軽口を叩くのだろうか、と

私はいくらか眉をひそめるような気持になった。ところが彼は私に近寄るや、「困ったことになりましたねえ……」と言ってベッドのそばの椅子に腰を下ろし、それからもう一度「ほんとに、君、困ったことにね……」とつぶやくと、まるで自分自身のことのように頭を抱えこんでしまい、夏至にまもない雨の日が室の内側からようやく暮れはじめた頃になっても、まだ黙って坐りついていた。

語り手からすれば、もつとも自我の確立したモデルであったはず先輩が、ここに来て自我の皮相性を暴露し、語り手に同調してしまったわけで、語り手の心象の中では、会社におけるパニックの条件が完全にそろったというわけである。

『山月記』の作者は、才能を空費した李徴の悔恨を虎として葬ることで作家として自立した。古井由吉は、『先導獣の話』で語り手を『先導獣』とすることによって、独自の道を切り開いた。二つの作品が成立した時期の差は、約四半世紀である。ここで注目されるのは、『山月記』のパロディー化という方法を可能にした、この二つの作品の間の違いが、社会構造の変化に伴う人間そのものの変化を見事に反映していることである。